

## 学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 吉川 侑輝君

論文題目 日常的活動のなかの音楽の観察  
——練習場面におけるエスノメソドロジーを中心に——

### 審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員

博士（文学） 近森 高明

副査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員

Ph.D in Sociology 池谷 のぞみ

副査 東京通信大学情報マネジメント学部教授・慶應義塾大学名誉教授・元社会学研究科委員

文学修士 浜 日出夫

副査 立教大学社会学部教授

博士（社会学） 前田 泰樹

### I 本論文の構成

従来より音楽学、音楽社会学、民族音楽学などが、それぞれの科学的関心のもとで音楽という現象を観察し、その特徴を明らかにするという課題と取り組んできた。本論文が取り組んでいるのも同じ課題であるが、本論文では、そもそも研究の対象とされている音楽に従事する人びとが、日常的活動における実践的関心のもとで、自分が従事している音楽という現象をどのように観察しているのかを明らかにすることによって、音楽という現象の特徴を明らかにするという方針が採用される。具体的には、日常的活動としての練習場면을主要なフィールドとして、音楽家たちが演奏をつうじて音楽を組みたてていくときに利用しているさまざまな方法論（エスノメソドロジー）を解明する「演奏分析」が試みられている。

本論文の構成は以下のとおりである。

目次

凡例

はじめに

### 第1章 序論

1.1 本論の目標と本章の目的

1.2 科学と日常

1.3 非専門家と専門家

1.4 エスノメソドロジー

1.5 本論の目的

### 第2章 先行研究—練習場面における演奏分析にむけて

2.1 本章の目的

2.2	先行研究
2.3	研究の概要
2.4	分析
2.5	議論
2.6	小括—練習場面における演奏分析にむけて
<b>第3章</b>	<b>技術についての注記—想起としての分析</b>
3.1	本章の目的
3.2	先行研究
3.3	エスノメソドロジー研究における技術
3.4	「精巧なりマインダー」としての技術
3.5	議論
3.6	小括
<b>第4章</b>	<b>練習場面におけるエスノメソドロジー (1)</b> <b>—アンサンブルにおける演奏の提案</b>
4.1	本章の目的
4.2	先行研究
4.3	データとトランスクリプト
4.4	分析
4.5	議論
4.6	小括
<b>第5章</b>	<b>練習場面におけるエスノメソドロジー (2)</b> <b>—相互行為としてのチューニング</b>
5.1	本章の目的
5.2	先行研究
5.3	データとトランスクリプト
5.4	分析
5.5	議論
5.6	小括
<b>第6章</b>	<b>練習場面におけるエスノメソドロジー (3)</b> <b>—ひとりでおこなう練習の理解可能性</b>
6.1	本章の目的
6.2	先行研究
6.3	データとトランスクリプト
6.4	分析
6.5	議論
6.6	小括
<b>第7章</b>	<b>結論</b>
7.1	本章の目的
7.2	演奏分析—現象の日常性・言語性・複合性
7.3	議論—演奏分析と会話分析
7.4	結論—日常的観察と科学的観察
7.5	課題と展望
おわりに	
文献	

## II 本論文の概要

本論文は7章から構成されている。まず、第1章から第3章では、経験的研究を開始するための、準備的な作業が行われる。

第1章「序論」では、音楽という現象の特徴を明らかにするという本論文の目的が提示され、それを遂行するための方針が考察される。まず、音楽の日常的な観察と科学的な観察の関係を示したうえで、前者を主題化することの意義が主張される。また日常的観察の明確化を遂行していくために、本論文が非専門家たち（素人）による観察よりむしろ、専門家すなわち音楽家たちによる観察を跡づけていくことの正当性が論じられる。そのうえで、そのような観察を解明していくために「練習」場面をフィールドとして、「演奏」にかかわるエスノメソドロジーを解明することが本論文の目的として提示される。

第2章「先行研究—練習場面における演奏分析にむけて」では、本論文にかかわる先行研究を検討し、本論文の課題を明確にする作業が行われる。具体的には、音楽にかかわるさまざまな活動のエスノメソドロジー研究を検討することにより、既存の研究の到達点や特徴を明確にすることが試みられる。こうした作業をつうじて、音楽にかかわる活動のエスノメソドロジー研究が近年、多様なフィールドにおいて展開されているだけでなく、発話などを利用しながら練習場面を組みたてていくための相互行為や、楽器演奏を利用しながら音楽を組みたてていくための相互行為といった、さまざまな現象を対象としていることが明らかにされる。こうした作業をふまえて、本論文では、練習場面をフィールドとして、人びとが演奏を組みたてていく方法を明確にするという課題——これを著者は「会話分析」に対して「演奏分析」と名づける——を設定することによって、音楽にかかわる日常的な活動の編成それ自体を探究していく、という方針が提示される。

第3章「技術についての注記—想起としての分析」では、経験的研究を開始するのに先立ち、方法論にかかわる、理論的考察が実施される。具体的には、エスノメソドロジー研究における認識論的な議論を検討することによって、研究者たちが利用しているさまざまな人工的な技術と、それによって探究されている日常実践の関係を明確にすることが試みられる。音楽を探究する専門的な研究者たちは、その活動において、ビデオカメラや録音機材を利用すること、トランスクリプトを作成することなどの、人工的な技術を利用している。こうした人工的な技術を利用することと、人びとの日常実践を解き明かすこととは両立不可能であるという批判がしばしばなされているのに対して、本章は、エスノメソドロジー研究者たちが人工的な技術を利用することによって従事しているのは、日常実践の詳細を効率よく想起することを支援する「精巧なリマインダー」を構築するという作業にすぎないこと、それゆえこうした専門的な技術の利用と日常実践の探究とは矛盾するものではないことを、エスノメソドロジー研究における認識論を概念分析と関係づけながら論じている先行研究などを参照しつつ確認している。

第4章から第6章では、第1章から第3章の議論をふまえたうえで、練習場面における経験的調査にもとづいた演奏分析が具体的に進められている。

第4章「練習場面におけるエスノメソドロジー (1) —アンサンブルにおける演奏の提案」は、アンサンブルのリハーサル場面をフィールドとして、演奏の開始直前における音楽家たちのやりとりに着目して、音楽演奏における「同期」という課題が、当の音楽家たちによってどのように取り組まれているかということを示している。具体的には、アンサンブルの開始場面のビデオを用いた相互行為分析をつうじて、本章は、音楽家たちが、{1} 演奏の提案、{2} 楽器の準備、{3} アインザッツの提示、そして {4} 演奏という4つの部分からなる連鎖構造をさまざまな仕方を利用して、演奏における同期を達成していることを事例にそく

して例証している。

第5章「練習場面におけるエスノメソドロジー (2) —相互行為としてのチューニング」は、アンサンブルにおけるチューニング場面に着目して、音楽家たちがどのような方法を用いて「ピッチ（音の高さ）を合わせること」を達成しているかを明らかにしている。具体的には、複数の音楽家たちで行われるチューニング場面のビデオデータから作成されたトランスクリプトを利用して、本章は、音楽家たちが、チューニング活動において、自らの楽器における音高がすでに調整されていることを他の演奏者に標示するために「n+n+s」と要約的に表現される表現形式を利用していることを例証している。

第6章「練習場面におけるエスノメソドロジー (3) —ひとりでおこなう練習の理解可能性」は、著者みずからの練習場면을録画したビデオデータを用いて、ひとりでおこなう演奏の公的な理解可能性について論じている。具体的には、即興演奏において適切な旋律を産出したり、演奏における誤りを訂正するためのさまざまな規則が、ひとりでおこなう練習のなかで複合的に利用されていることが明らかにされている。そのうえで本章は、ひとりでおこなう演奏が、潜在的には他人にもまた理解可能なかたちで編成されているのではなくては目下の練習が自分自身でも理解可能なものとはならないことや、演奏がそなえるそのような特徴が練習という活動の特徴をかたちづくっていることを主張している。

第7章「結論」では、本論文における経験的研究をつうじて得られた知見と、それが先行研究に対してもたらす貢献とを議論したうえで、本論文全体の結論や展望が述べられる。まず本論文の分析を辿り直すことによって、音楽の日常的な観察において利用されているプラクティスが、(1) 日常性、(2) 言語性、(3) 複合性を備えていることが論じられる。そのうえで、こうした知見が既存の会話分析や演奏分析をより体系的に展開していくことに貢献しうる可能性をもつことが主張される。また日常的な観察の再特定化を遂行することによって、既存の科学的観察が自らの探究をより省察的に行えるようになる可能性が論じられる。そのうえで最後に、調査対象やフィールドの拡張など、残された課題や展望が論じられる。

### III 本論文の評価

エスノメソドロジーは、ハロルド・ガーフィンケルが1967年に『エスノメソドロジー研究』を出版して以来、社会秩序の成り立ちを、その秩序を組み立てていくときに人びとが利用している方法論（エスノメソドロジー）を記述することによって、解き明かすという課題に取り組んできた。その対象は、日常の会話から始まり、電話による会話、授業や医療場面や実験室や法廷における相互行為、コンピュータによって支援された協同作業などへ広がり、またその方法も違背実験から、会話分析、相互行為分析、論理文法分析、概念分析、ワーク研究などへと展開してきた。本論文は、この半世紀におよぶエスノメソドロジーの展開においても、サドナウの『鍵盤を駆ける手』（1978年）などわずかな先行研究を除けば、世界的にもほとんど取り組まれたことのない、音楽家たちが楽器の演奏を通してどのように音楽を組み立てているのかを記述する「演奏分析」に取り組んだ、きわめて希少性の高い、独創的な研究である。

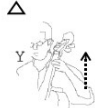
この研究を可能としているのは、第一に古楽のチェロ奏者でもある著者自身が有している音楽演奏に関わる専門的な知識・技能である。しかし、本論文は同様の専門的知識・技能を有する音楽家に宛てて書かれたものではない。おそらくそちらのほうが容易な作業であったはずだが、本論文はそのような知識・技能を持たない音楽の素人にも、音楽の専門家が演奏において行っていることを理解できることをめざして書かれており、そのことに成功していることは特筆すべき成果である。

その成功を支えているのはそのために著者自身によって独自に考案されたトランスクリプトである。会話分析には会話を書き起こすための標準的なトランスクリプト作成法があるが、演

奏分析には決まったトランスクリプト作成法は存在していない。著者は専門家が行っている演奏を素人にも観察できるようにするためにトランスクリプトを独自に工夫しており、将来の演奏分析に対して大きな貢献となっている。

2つ例を示しておこう。第一は、第4章「練習場面におけるエスノメソドロジー (1) —アンサンブルにおける演奏の提案」において、アンサンブルで演奏を同時に開始する同期活動を記録したビデオデータを書き起こしたトランスクリプトである (62 頁)。

22 [1] N: じゃあ またさっきの  
 23 [1] J: [うん さっきの  
 24 [1+2]N: さんじゅう [ (ご)



25 [2] yp: [×PLAY ((f音))



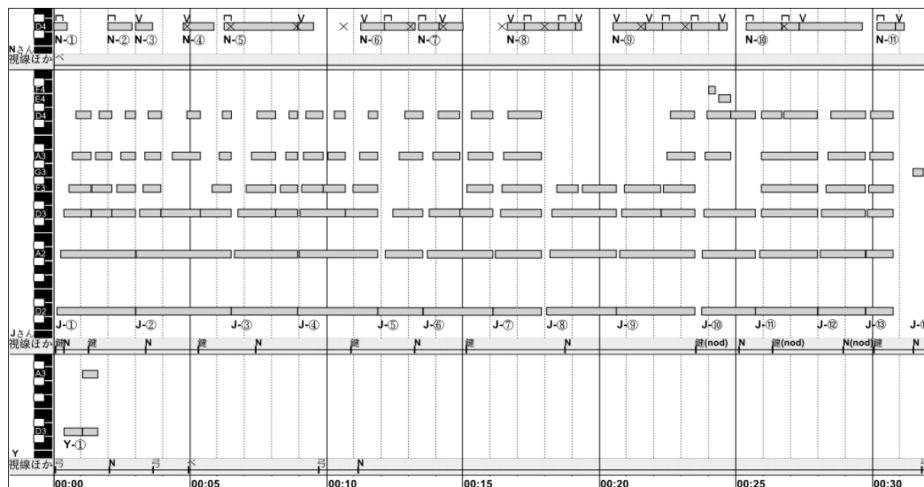
[2] +(0.7)  
 Δ



26 [3] N: .h:::  
 27 [4] jp: [×PLAY  
 28 [4] np: [×PLAY  
 29 [4] yp: [×PLAY



ここでは {1} 演奏の提案 (22~23 行目)、{2} 楽器の準備 (24~25 行目)、{3} アイソレーションの提示 (26 行目)、そして {4} 演奏 (27~29 行目) という連鎖が、会話だけではなく、身体の動き、吸気音 (26 行目)、楽音まで含めてマルチモーダルに書き起こされており、素人にも音楽家たちが演奏の開始をどのように行っているかが直観的に理解できる。



もうひとつは、第5章「練習場面におけるエスノメソドロジー (2) —相互行為としてのチューニング」において、ヴァイオリン奏者のNとチェンバロ奏者のJとチェロ奏者のY(著者)がチューニングを行っている場面のビデオデータを書き起こしたトランスクリプトである(73頁)。このトランスクリプトでは、縦軸に沿って上からN、J、Yが3段に配され、それぞれの楽音のピッチを表す鍵盤が描かれている。横軸には00:00秒から00:30秒までの30秒間に各奏者が演奏した楽音の音高とその長さ、ペグを調整する音(X)、弓の動き、視線やうなずきなどの身体動作が書き起こされている。このトランスクリプトからは、00:30秒においてNがD4音を下げ弓(Ⅱ)と上げ弓(Ⅴ)で「レーレ」(n+n)と弾いたあと(N・①)、無音(s)を挟んで、Jが新たにG3音の演奏を始めていることが読み取れる。これによって、Nがn+n+sによってd線のチューニングの終了を提示し、Jがそれを受け入れ、続けて新たにg線のチューニングの開始を要求していることが理解できるものとなっている。

これらのトランスクリプトは、そこで記述されている演奏を、自身も演奏者である著者が想起できるだけでなく、本論文の読者もまた想起することができるための「精巧なりマインダー」となっている。

本論文は音楽演奏の経験的なエスノメソドロジー研究として独創的な成果を挙げている点で優れているばかりでない。経験的研究の準備作業として行われている先行研究のレビュー(第2章)、方法論的考察(第3章)もまた、それ自体独立した業績としてエスノメソドロジー研究に対して貢献するものとなっている。

しかし本論文には課題もまた残されている。

第一に、第6章「練習場面におけるエスノメソドロジー (3) —ひとりでおこなう練習の理解可能性」は、第4章・第5章が複数の演奏者が行う練習場面を取り扱っているのに対して、著者がひとりで行っている練習場面のビデオデータを用いて、ひとりで行う練習の公的な理解可能性を示すという、本論文の中でもっとも困難な課題に取り組んでいる。第4章・第5章の記述が素人にも直観的に理解できるものとなっているのに対して、第6章の記述は高度な音楽学的知識を利用してなされていることもあり、論理的には理解可能であるものの、「リマインダー」としての質が第4章・第5章とは異なるように思われる。より広範な読者を想定する場合にはさらに工夫が必要と思われる。

第二に、本論文は、全体として緻密に議論を進めることに重点をおいており、厳密で手堅い議論が展開されている半面、結果的に主張が控え目に提示されているところが見受けられ、独自性の特徴づけにおいてやや弱いという印象を与える場合がある。

第三に、演奏のエスノメソドロジー研究として見た場合、本論文の最大の先行研究となるのはサドナウの『鍵盤を駆ける手』である。本論文では先行研究のひとつとして検討されているだけであるが、出版にさいしては、『鍵盤を駆ける手』と本論文の関係についてより主題的に論じることが幅広い読者にとって理解の助けとなると思われる。

第四に、本論文では3つの演奏分析が試みられ、それは演奏分析という研究プログラムの可能性と方向性を示すうえで十分な成功を収めているが、今後は専門家の音楽演奏に限らず、より幅広い音楽演奏を対象として演奏分析を展開してほしい。著者はすでにカラオケや音楽療法を対象とする研究を開始しており、音楽のエスノメソドロジー研究に対するさらなる貢献を期待したい。

#### IV 審査結果

このようにいくつかの課題は残されているものの、審査委員一同は本論文が博士(社会学)を授与するにふさわしい水準に到達していると判断する。